

### 3. 口腔がんスクリーニング検査に関する知識と手法－専門分野と経験年数からの比較検討－

Knowledge and practice of oral cancer screening in teaching faculty - Comparison of specialty and year of clinical experience

○古城 慎太郎, 阿部 亮輔, 齋藤 大嗣,  
大橋 祐生, 飯島 伸, 宮本 郁也,  
山田 浩之

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座  
口腔外科学分野

日本では口腔がんの罹患率や死亡率が増加傾向にあるにもかかわらず、歯科医師の口腔がんスクリーニング検査に対する関心は高いとは言いがたい。そこで、われわれは岩手医科大学附属病院に所属している歯科医師に対して口腔がんスクリーニング検査に関するアンケート調査を行ったので報告する。

**【目的】** 歯科医学の教育機関に所属する歯科医師の口腔がんスクリーニング検査に対する知識、手法、自信および阻害要因を評価することを目的とした。

**【対象と方法】** 岩手医科大学附属病院に所属する歯科医師 132 名（口腔外科を除く）を対象と

して、口腔がんスクリーニング検査に関するアンケート調査を行った。歯科医師の経歴（3項目）、検査内容（14項目）、検査の動機（4項目）、検査に対する自信と阻害要因（4項目）の25項目の質問でアンケートを構成した。これらの質問に対する回答を歯科医師の専門分野と経験年数により比較して分析した。

**【結果】** 110名からアンケートに対する回答が得られ回収率は83%であった。歯科医師の専門分野は保存、補綴系が67名、その他が43名であった。53%の歯科医師の経験年数は5年以下であった。初診時に口腔がんスクリーニング検査を常に実施していると回答したものは43.6%で、経験年数や専門分野間での差異はなかった。検査の動機では、がんの既往や喫煙習慣を有する患者情報が口腔内全体を診察する強い動機になっていたが、ヒトパピローマウイルス感染やアルコール摂取への関心は低かった。検査の知識や手法に自信を持っている歯科医師の割合は、特に経験年数の浅い歯科医師で低い傾向がみられた。若い歯科医師が口腔がんスクリーニング検査の実施を避ける理由の80%以上を知識や技能の不足が占めていた。

**【結論】** 口腔がんスクリーニング検査の教育と研修を若い歯科医師に対して積極的に行うことが、院内での検査の普及に重要であると考えられた。